

〈エスキス〉 塩田三郎と 〈塩田文庫〉

—幕末期を中心に—

伊藤尚武

〈塩田文庫〉の概略

文庫の名称は当館で所蔵する塩田三郎の〈遺書〉に捺押された〈Private Library of Shioda Tokio Japan〉の英文にしたがう。明治25年11月26日、館は未亡人キンより〈遺書〉を受贈するにあたり、〈特ニ塩田文庫ノ名ヲ設ケ永ク其書籍ヲ保蔵シテ公衆ノ閲覽ニ供スルコト〉⁽¹⁾にしている。「公益ノ用ニ供スベシ」という塩田の遺言は、集書に対する自負と願望を語るが、幸い、家人の篤実な処置によって、ほぼ完全な形で現在に残された。なお文庫はまとまりある個人英書コレクション⁽²⁾として、わが国で最も早くに蒐集が開始されたものと目される。

文庫受入れ時の総点数は574部748冊7枚となっており、今回調査し得た点数を若干上まわる。この点数は未亡人の賞典上申のため東京府知事富田鐵之助より要請のあった「和訳目録」書上時の⁽³⁾もので、『洋書原簿 明治廿五年』と突合せたところでは、文庫中の複本や雑誌の保管替、交付に原因するようである。

文庫は所謂〈日本函〉のG~K項に別置され、全体的把握は比較的容易である。ただ今次大戦後に、明治以来収蔵の主として辞書類が再整理され、戦後収集の洋書(旧

上野図書館洋書)に移された。したがって塩田文庫のものも相当数がそちらに埋れている。しかるに閲覧目録の旧帝国図書館カードは未処理のまま残ったものもあり、利用の際、注意を要する。

受贈当時の年報に〈英書コレクション〉と記されているように、文庫は概略英書からなり、この点、塩田を仏学の先覚者として知る者には、やや意外の感を抱かせる。

主題でみると宗教・哲学、法律・政治、経済・社会、歴史・地誌、科学・技術、語学・文学と多岐に亘り、後年の個人コレクションにみられるような系統を重んじるアカデミックな集書や、ビブリオマニアの色合いはない。

Kaempfer, E. "The History of Japan, Giving and Account of the Ancient and Present State and Government" (Lond. 1728 2冊) 等、今日、稀書というべきものも散見されるが、これらはむしろ例外であって、文庫は塩田がその折々に必要とした通行本からなるワーキング・ライブラリーと呼ぶに相応しい。個人著作で最も多いのはスペンサー(H. Spencer) 13点、ついでミル(J.S. Mill) 8点と、同時代の思潮を色濃く反映したものである。そのためか書入れの多くは、別人(閲覧者)の手になる。これはコレクションを調査する上では、汚点ともいえようが、館に収蔵されてから、文庫が良く利用されたことを物語っ

ている。

刊年は1800年以前7点、1800～59年33点、1860～69年98点、1870～89年357点、[n. d.] 59点である。

文庫の紹介は目録を以って語るのが定法であろう。しかしここにその余裕はないので、幕末期友人の立広作と共に、わが国で初めて実務に耐える仏語を修得したといわれる塩田の外国語との出会いと幕末期における展開をエスキスに誌し、それにまつわる洋書のいくつかを紹介する。併せて語学関係図書に限って目録を掲げる。すなわちこれらの図書は彼の外国語習得との係りもさることながら、先述したように、再整理されたものが多く、別置された文庫から外れているため、塩田文庫としてアクセスする手だてがなくなっているためである。

塩田三郎の位置

塩田三郎は彼の生きた時代が最も必要とした能力を具体化し得た人物の一人である。しかし彼について書かれた文献はまことに少ない。纏った伝記資料は墓誌と対支功労者伝記編纂会編『対支回顧録 下』(同会発行 昭11)の列伝に見る程度である。顕彰の枠に嵌まったものとはいえ、前者は生涯を、後者は維新後の事蹟をよく伝えている。主要な人名事典等は大概墓誌に従う。彼の名前は幕末、明治前期の外交史料に見られ、現在『朝日新聞』に連載中の萩原延寿『遠い崖—サトウ日記抄』にも時折現われる。また近年になって仏学史関係論文でも紹介されるようになったが、簡略である。

文献にみる彼の位置は幕末期には訳官という身分のゆえに旧幕府開明親仏派小栗上

野介忠順、栗本鋤雲鯤の影に添う。また後述するように相手となる仏国公使レオン・ロッシュ(L. Roche)、訳官ウージェーヌ・メルメ・ド・カション(E. Mermet de Cachon)の脇にある。

維新後明治政府に徴されてからは、幕末に自ら立合ったこともある条約の改正に係る。岩倉使節随行時の条約改正交渉を初め、外務省翻訳局長時代、外相井上馨による条約改正外交の条約改正予議会副委員、更に参事院議官を経て、明治18年12月に榎本武揚を襲いで駐清国特命全権公使となつてからの李鴻章、曾紀沢を相手とする条約改訂交渉とその中断まで、彼の位置は一貫する。ただ外交官という職掌柄、国民一般にあらわれることは少なかったようである。稀有ともいえる語学の才と温厚誠実の定評あった人柄は、列強に対する後進国家の主張に用いられ、西欧近代思想、文物紹介という同時代知識人の常態とは縁が薄かった。伝記資料の少なさは自らを語らなかつたこと、この点によると考えられる。若き日の彼の姿は、むしろ外国人の記した雑録、例えば伊国使節アルミニオン(V. Arminjon)の日本紀行などによく捉えられている。また明治22年5月に北京で客死する前年、在北京西歐人学者たちの団体であった北京東洋学協会(The Peking Oriental Society)会長に選ばれていることが、彼の私的な立場を語る例であろう。当時彼はJohnの愛称で親しまれたようである。文庫には会長就任時の“Address of Mr. Shioda on Taking His Seat as President of the Society, January 10, 1888”および英語論文“The Origin of the Paper Currency(鈔Ch'ao) of China”の抜刷とそれらを収めた“Journal of the Peking Oriental Society”を見ることが出来る。管見の範囲ではこれ

を紹介した文献を知らない。

函館—外国語学習と集書

松雲塩田篤信、通称三郎は天保14年11月6日(1843.12.26)江戸浜町で幕府医官塩田順菴の次子に生れた。父は加賀宮河家から塩田家に入り八代を嗣いだが、祖父宗三の親戚にあたる宗叔を惣領に迎え、長子徳淳を村山家に出して幕医となし、三郎を三男とした。元治元年10月(1864.11)、宗叔の病死に伴い、三郎は塩田家の惣領として幕府に届けられるが、彼が医を嗣がずに、訳官となった職業選定はこれに係る。しかも嘗て順菴が宮河家惣領であったため、三郎は暫く宮河(川)姓を称した。英仏語学習時代が時期的に重なり、当時の文献では二つの姓で現われる。このため塩田、宮河を同一しないまま記した文献も見受けられる。ちなみに当時受贈した洋書に見える献辞は悉皆宮河宛となっている。宮川、塩田の両通詞に疑問を抱かれた長谷川誠一氏は「宮川三郎と塩田三郎」の一文を、月刊『南北海道史』(24号 1~3頁)に寄せて、同定を試みられている。これは後述するように氏の触れられなかった『村垣淡路守公務日記』(『大日本古文書 幕末外国関係文書之附録』)、および同叢書に収録された塩田の和解に明示されているが、宮河姓を称した時期(安政6~文久3)を例示するのに引用された〈ブレイク書簡〉と〈訳官黜陟録〉の塩田(8)に関する記録から、塩田文庫の来歴を知る上で、貴重な示唆を受けた。

父順菴は三郎出生の翌年に外班直医となるが、同僚との折合い悪く辞職し、当時頻りに出沒する外国船に触発されて、『海防彙議』(嘉永2~6)を纂し、宗叔がこれを手

伝った。順菴の名は本叢書によって今日も知られる。彼は安政2年(1855)函館在住医師(当初石狩詰)に再任され、翌年8月(1856.9)家をあげて移住した。三郎13才の時である。彼は6年間を函館に過すがそこでの人との出会いがその生涯を定めた。

塩田が正規に英語学習を始めたのは安政4年11月(1857.12)で、師は安政元年神奈川条約の和解にも加わった名村五八郎である。『公務日記』4日の条に“一、立文蔵忬広作通詞見習、順庵三男塩田三郎御用所見習に差出度段、五八郎願之通廻濟、広作儀は申上候積り”の一項がみられる。

神奈川条約で水薪供給港と決まった函館の正式開港は安政6年(1859)である。しかし条約締結時から既に来航外国船との応接・交渉は繁忙となっていた。ところが函館で英語が解せたのは、条約和解の後、長崎に戻らずに村垣に従って樺太に渡り、帰途函館にとどまった名村唯一人だったようである。安政2年に奉行は吏員2名に対し名村の下で英語稽古を命じている。しかしこの試みは思うように捗らず、そのため名村は幼年者の選拔速成教育を上申し、塩田たちに公務の余暇をもって、英語を教えた。先の『公務日記』は立広作と塩田の二人が頭角をあらわし、公に登用された記録である。塩田が御用所見習の形をとったのは医籍につらなるためであろう。翌5年1月下旬(1858.2)二人は名村に伴われ、講読書を携えて、米国領事館のライス(E.E. Rice)の許に通い始めている。それは必要に迫られた英才教育ともい(9)うべきものであった。ついでながら、墓誌に〈漢学を栗本匏庵に英学を名村五八郎に仏学を私人某に受く、僻境書に乏しく大抵手抄す〉とあって、後年外国奉行となり、塩田の才を十全に用いた栗本の函館赴任は5年5月である

から、塩田の正規の学習は英学に始まったといえよう。

彼の外国語修得の幸運は幼年時に名村という師に恵まれ、その時代常道であった蘭学を経ることなく、かつオーラル・ワークの方法で英語を学んだことである。それを素地に彼はまた仏語を修得する。ちなみに蕃書調所で蘭学を正規の授業としたのは安政4年正月(1857.2)、英語が教授科目となったのは万延元年8月(1860.10)、仏語は文久元年6月(1861.7)に小林正十郎、小林鼎輔が教授手伝となつてからである。ところで名村は当時塩田が蘭人との交渉⁽¹¹⁾も行ったことを記しており、慶応2年(1865)に来日したアルミニオンも「通訳官として随行したのは塩田三郎という率直な頭のいい青年で、彼はヨーロッパの三ヶ国語を良く知っていた」と書いているので、おそらく蘭語についても、相当の知識は持っていたのであろう。文庫に残る蘭語学習書は、Kujiper, G. "Eléments de Grammaire Néerlandaise à l'Usage des Etrangers" (Le Haye 1856) があるが、ほかに蘭書は見当たらない。

塩田文庫の魁は名村から贈られた"Ray's Arithmetic Induction: Pt. II. Through Course Mental Arithmetic Induction and Analysis (Cinci., [n.d. c1849])"と思われ。本書は語学教材とも思われぬが内容からみて、英語を始めた頃のものであろう。文庫中、唯一冊、見返しに公印の〈函館之印〉、とびらに〈松雲藏書〉の方角印が捺してある。このためか名村が表・裏見返しに、"Belongs to Mr. Miyagawa/From Namura presented to Miyagawa"とわざわざ書付けている。いつ宮河と姓を変えたか判然としないが、ライスの所に出かけた時はまだ塩田である。『公務日記』安政

6年5月21日(1859.6.21)の条“一、塩田順庵三男宮川三郎、武次次男海老原鏗四郎、鮑太郎弟鈴木清吉、通弁御用申渡候旨申来ル”とあり、この時既に宮河姓となっている。当時村垣は江戸に戻っているのので、改姓はそれよりも早く、5年から6年にかけてであろう。

同年9月(同10)英国領事ホジソン(C.P. Hodgeson)の来任に伴い、塩田は鈴木清吉、石子谷五郎と共に仮領事館の称名寺に出役となる。ホジソンの記述に従えば、奉行提供の三名は彼の仔細万般を記録し、出入の総てを誰何する“近しい密偵”であった。しかし、そこには彼の妻、娘もいたので、塩田にはネイティブ・スピーカーと交流する恰好の英語学習の場となった。

奉行宛のホジソンの書簡を当時塩田が和解しているの、参考までに紹介する⁽¹²⁾

「未十月八日 差出ス」

貌利太泥亞コンシユル館

箱館 千八百五十九年十一月二日 安政六年十月

八日 フリタニヤコンシユル、シ・ヘムフル

トン・ホトソン

箱館奉行尊下

壹分百の一包を引替へのため、予、役人石子を送りしに、運上所又は金蔵において、一分八ツより多くは得ざることを云い帰れり、是は、爾の命令なるかを尋問す、且いつ迄此不都合の事ある哉、是を捨置へからず、引続き此の如哉

恭敬シ・ペムフルトン・ホドソン

右文意和解仕候 以上

未十月

宮河三郎

(函館奉行書類之
内各国書翰留)

英文との対校は出来ないが、最も初期のもので、巧拙はともあれ、その意は良く伝えている。

ホジソンは交渉に臨む際、強圧的態度をとったことで知られる人物で、この和解にもその片鱗をうかがうことが出来る。

さて塩田の領事館出役は、程なくして彼の人生に大きな係りを持つことになるカシヨンの邂逅を齎した。同年10月(同11)下旬に来函したカシヨンは仏国領事代理を兼ねるホジソンの処に仮宿し、奉行所提供の貸家を断って、在住限りの条件で、称名寺境内に小家を建てた。

カシヨンは⁽¹⁴⁾パリ海外布教団に属する神父であったが、安政2年に一度琉球に密入国し、5年の日仏通商条約締結時にはグロ男爵(J.B.L. Gros) 訳官となって同行、更に初代の総領事ベルクール(P. Bellecourt) 付訳官として再来日した。彼はキリスト教禁制後、最初に来日したカソリック神父である。しかし来日後まもなく、何故かベルクールと齟齬を生じて、一旦上海に戻り、長崎を経由して函館に来住した。いうまでもなく伝道が目的であるが、⁽¹⁵⁾この時も肩書は訳官である。彼は日本語も良くし、来函後日本文書簡を奉行に送って、驚嘆させている。彼は役人の一人に添削を頼んだ処、勝手に持ってゆかれたと釈明しているが、奉行は堪能な日本語に感銘を受けた旨の返書を認めている。栗本が“外柔内残”と形容したカシヨンの⁽¹⁶⁾人柄と行動は甚しい毀誉褒貶がみられ、維新时期に至るまで矛盾に充ちたもので、これも奉行所上層に接近をはかる演出のひとつではなかったかと想像される。いずれにしろ彼の堪能な日本語は周辺の人々に親近感を生んだ。奉行竹内下野守の彼に対する信頼は極めてあつく、栗本はフランスの現況を聞きした『鉛筆記聞』⁽¹⁷⁾

(文久元)を著した。カシヨンが仏国公使ロッシュの懐刀となって活躍する元治元年以降の幕仏接近において、二人が大きな役割を果す契機がここに生れ、塩田もそれに係ることとなる。

カシヨンと塩田との関係でみると、英国領事館詰の彼とは到着直後に顔を合せた筈である。またホジソンは彼等を密偵と見做していたので、そこでは外交用語の仏語が使用されたのではなかろうか。この時、塩田の関心が初めて耳朵に触れた仏語に向ったことは十分に考えられる。翌万延元年4月にわが国初の直接授業による仏語学塾がカシヨンによって開かれる以前に、二人は師弟関係となっていたと思われる。1859年に学校を開設したと報告したカシヨンの書簡がフランス外務省に残っているのは、既に非公式に塾を開いていたことを指すのであろう。

当然のことながらこの頃から塩田と外国人との交渉は繁くなる。ホジソンの記述等からみて、カシヨンを交えた泊りがけの周遊にも同行したようである。

安政6年暮、名村五八郎は所謂万延元年遣米使節の副使となった村垣に従うべく、急拠江戸に発し、函館における外国との応接は塩田達若い通詞の肩にかかった。付言するとこの遣米使節には実兄の村山徳淳も外科医として参加し、『奉使日録』を著している。すなわち村垣、名村、村山の渡米にみられるように、塩田の周囲で海外は間近にあった。

文久に入ると文庫にも彼と交渉のあった人物から贈呈された図書がみられる。動物界のブラキストン線⁽¹⁸⁾で知られる英国人ブラキストン(T.B. Blakiston)は文久元年6月(1861.7)に初来日し、函館に逗留して駒ヶ嶽登山を行った。彼は1861年10月の日

付のある Cuvier, G. "Animal Kingdom, arranged according to Its Organization, forming the Basis for a Natural History of Animals" (Lond. 1840) を残している。文久2年1月(1863.2)に來日し、翌年1月(同2)まで函館に滞在した米国人鉱山・地質学者のパンペリー (R. Pumpelly), ブレーク (W.R. Blake) は、わが国初の招聘お雇い外国人と呼ぶべき人物達で、彼らもまた塩田に本を贈っている。パンペリーの "Manual of the Mollusca, or Rudimentary Treatise of Recent and Fossil Shell" (Lond. 1858) には Hakodate Dec. 8th 1862, ブレークの Buckle, H.T. "History of Civilization in England" (N.Y. 1861 2冊) には Feb. 10th 1863 Hakodate, Japan の日付がある。前者は幕府との契約終了の頃、また後者は帰国に際して贈られたものである。なお塩田は二人の鉱物資源調査に大島高任、武田斐三郎達と通訳兼学生として参加した。文庫にはパンペリーの "Across America and Asia; Notes of a Five Years' Journey around the World and of Residence in Arizona, Japan and China" 5th ed (N.Y. 1871) があり、この中で塩田たちとの心暖まる交流が記してある。特に長崎への出立が迫った二人に、別れを惜しむ塩田たちが金銭では購えぬ古刀や伝来の家宝を贈って、涙を流し合う情景は幕末技術交流史のエピソードとして記憶されるべきものである。

ところでブラキストン、パンペリーがいわば手持ちの専門書を贈ったのに対し、ブレークは塩田に翻訳するよう言置いて本を残したという。彼とパンペリーは奉行所で英語教授も行っているのだから、塩田の語学力を知悉していた。"History of Civilization in England" がその該書であろう。彼は

塩田がこれを翻訳し得るとみたのである。約束は遂に果されず、また当時の塩田の力量で果してこの大著を訳し得たかは疑問であるが、ブレークが塩田の才を如何に評価していたかの左証にはなるだろう。更に彼は上海から村垣に宛てた書簡でも、塩田、大島、武田を賞讃し、米国学を勧めた。帰国後も1865年に "Chamber's Information for the People: A Popular Encyclopaedia (Phil. 1860) をサンフランシスコから塩田に送り、1872年に米国で再会した時には、自著の "Production of the Precious Metals" (N.Y. 1869) を贈呈している。

塩田の最初の洋書購求は函館を退去するカシヨンの蔵書を譲り受けた文久3年5月(1863.6)のことで、この時彼は20両を奉行所から借用した。当時の20両が如何ほどの額であったかは、師の名村が文久元年から運上所構内別席で行った英語教授掛手当が年々5両だったことからも想像出来る。しかし洋書の価格がまた法外であったことも周知のことで、例えば『福翁自伝』には、諭吉が英蘭対話小字引を求めるのに、中津藩に嘆願して5両の代金を支払って貰った有名な逸話がある。

墓誌にある〈書に乏しく大抵手抄す〉は先賢の碑文にみえる常句であって、彼の場合、事實は借財を以て購求し、またその機会に恵れたのであった。〈訳官黜陟録〉亥五月四日に〈仏人カシヨン儀備国に付同人書籍買求の為貳拾兩拜借願〉のあることを、長谷川氏は文久3年塩田姓通詞の出現として紹介されている。付言するとこれはカシヨンの事蹟を迎る上でも貴重な意味を併せ持っている。すなわち彼の函館退去は文久2年とした文献がみられ、更に同年秋江戸で仏語学塾を開設したと書かれている。富田仁氏が近年になって、諸種の資料

を検討し、文久3年夏頃と訂正されているが、塩田のカシヨンの旧蔵書籍購入の経緯²²⁾は、これを確定するための好補助資料といえるだろう。

さてカシヨンの旧蔵書であるが、当時の洋書の価格、また師弟関係にあったとはいえず、病院建設の企てに躓き、函館退去後に巨額の賠償金を日本側に要求したカシヨンの身辺事情から、まともな冊数ではなかったと思われる。文庫に彼の署名のある図書は見当らず、それと覚しき数点も断定するには至らない。したがって推測の域を出ないが、そのひとつを紹介すると、Medhurst, W.H. "English-Japanese and Japanese-English Vocabulary compiled from Native Works" (Batavia, 1830) がある。この字書については亀田次郎氏の紹介(『書物の趣味』2号)があり、更に村上英俊校訂の翻刻『英語箋 一名米語箋』(安政4~文久3)で知られるので、内容には立入らない。ただ少しく協道にそれるが本書は1839年にも刊行されていて、『英語箋』はこの後刷を元版に使った可能性がある。

『英語箋』の扉には Batavia 1839 と刻され、このため諸種の英仏学関係書誌の解題は1830の誤りと糺し、それが定説となっているが、1839年刷の存在に言及したものはみられぬことを記しておきたい。

さて該書は羊皮で私家装幀され、当館で所蔵する亀田次郎旧蔵の原裝本に比して、天地が1.5センチ裁断されている。蠹損甚しく、戦前に図書館で解体補修している。元の見返と遊び紙は剝落、前付 v~vi, 本文63~73頁は落丁する。本文に鉛筆と鷲ペンによる仏語の書入れが夥しくみられ、漢字欄に毛筆の補充と僅かながら片仮名の加筆がなされている。当初塩田の書入れと思われたが、仔細に見ると仏語と片仮名は西

歐人の手、漢字は中国人の手と思われる。次に一例を示す。

[カツエル]—[etre dans la famine] (p. 210) ナデル—[勸]—To encourage, to sooth—[toucher] (p. 244), マオトコ—[淫人者]—Ma-o-to-ko—An Adulterer (p. 275), コイヌ—[小狗]—Koi-noo—A puppy—[Petit chemin] (p. 288), ヲワエル—[繞綁]—Yu-wa-her' To bind—[結半分]—[lier] ([] は書入れ部分)

これらは本文中 "Defects and disease" 項などに偏在し、作業が途中で放棄されたことを窺わせる。カシヨンが函館時代に編集した "Dictionnaire Français-Anglais-Japonais (Paris, 1866) 巻頭のバジェス (L. Pages) の「凡例」では、カシヨンが本書も参考としたことが記されている。第一分冊 (A~E) だけで未完となったこの辞典が本書より格段に卓れていることは勿論であるが、編成の原型はここに求められるのではなからうか。カシヨンが他に参考としたシーボルト (F. Siebold), ホフマン (J. Hoffman), ゴシュケヴィッチ (I.A. Gosczevich). 堀達之助の辞書を手にする以前、おそらく琉球密航頃か、その前後に本書を利用して、辞書編纂の計画を抱いたのではなかったかと推測される。カシヨンの筆跡未見のため、この書入れが彼の手になるかどうか断定しかねるが、識者による検討がのぞまれる。

万延元年 (1860) にカシヨンが仏語学塾を開設したことは既に述べたが、塩田 (ここでは宮川) は抜群の成績を修めたという。ただ当時の授業がどのように行われたかは判っていない²³⁾。またテキストも知られていない。塩田は極めて几帳面に資料を残しているので、何等かの資料があるかと調べてみたが、それと推測出来るものは見出

せなかった。塩田が仏語学習の初期に使用したと思われる教科書と辞典には次のようなものがある。

Havet, Alfred “The Complete French Class Book; Grammatical and Idiomatic Manual for the Use of British Schools and Private Students (French in one volume)” (Lond. 1853)。角革装の本書はメドハーストの字書と同様に解体補修が施され、元の見返しは欠落する。本文等は傷んでおらず、書入れも少ないが、演習問題など内容全般に使用した形跡が残っている。とびらの上辺右隅に Lachlan Fretcher 22 April 1854 と署名があり、同中央に擦れて判読出来ない長方印が割ってある。ただ本書は署名の位置から裁断されていることが知られ、割印とは断定出来ない。しかし粗略な捺し方から個人蔵印ではないだろう。フレッチャーについては大槻如電原著佐藤榮七増訂『日本洋学編年史』(錦正社昭40)に安政5年7月長崎に開設された英語伝習所で英人フレッチェル(Lachlan Fretcher)が教えたとある。本書は彼の旧蔵書である。塩田が本書をいつ入手したかは明らかではない。例えば長崎を經由して函館に来た人物はカション、ホジソン、モンブランなど少くないが、直接本書と結ぶには、筆者の調査は不十分である。“Japan in Yezo: A Series of Paper Descriptive of Journeys undertaken in the Island of Yezo at Intervals between 1862 and 1882, by T.W.B. (Yokohama, 1883)の中で、ブラキストンが文久初年の函館における通訳の語学力を評価した個所にフレッチャーの名前がある。しかし、これは函館のフレッチャー家に盗人が入った時の奉行書簡が残っており、C.A. Fretcher という別人である。森永種夫校訂『長崎幕末史

料大成 第1巻』(長崎文献堂 昭44 113頁)に、フレッチャーの書簡がみられる。彼は文久元年10月から文久3年2月まで長崎で教え、その後、江戸・神奈川に出ることになっているので、同年秋塩田が江戸に召還されてから入手したと考えるのが現在のところ妥当のようである。いずれにしろ、本書はわが国仏語学草創期に英国人によってもたらされ、塩田が使用した本格的な外国人用の仏語教科書である。

Spiers, A. “Dictionnaire Général Français-Anglais; Nouvellment Rédigé d'Après Dictionnaire”は背を補修するが、本文に傷みは殆どない。前とびらに“Souvenir d'estime/et d'affection à Monsieur Shioda/Messetot, 見返しに Messetot, 脇に Marine の書入れがある。メセトという人物を詳にし得ないが、刊年、版次等から、それほど後年に献呈されたとも思われぬ。平尾魯仙『洋夷茗和』(安政3 影印青森県立図書館 昭45)等を読むと、既に当時から相当数の外国船が函館港に出入りし、数百人の乗組員が上陸していた。また先述の“Japan in Yezo”によれば、文久初年に女性4名を含む20名前後の外国人が定住し、銃を持った仏人の脱走兵(French deserter)も隠れ住んでいたことが記してある。献辞が宮河でなく塩田宛となっている点で疑問も残るが、函館時代に邂逅した仏国海軍士官から贈られた可能性も考えられよう。

ところで塩田は函館時代にモンブラン伯(De Montblanc)の許でも仏語を学んだという河田熙の証言がある。慶応3年にパリ万国博で、薩摩・琉球王国を演出し、私兵を率いて薩摩にきたモンブランに、幕臣の塩田が仏語を学んだのであれば、それも又、個人と歴史との係りにあられる皮肉

の貌といえるだろう。文庫にはモンブランとの係りを直接窺わせる資料は見当たらないようである。

江戸・横浜と渡欧

文久3年9月(1863.10)、塩田は江戸に召還され、直ちに横浜鎖港談判使節池田長発の仏語通詞として渡欧することとなる。一行は同年12月29日(1864.1.2)に横浜を解纜し、往路香港で彼は日本に戻るカションと再会している。使節は最初の訪問国フランスでの7回に亘る交渉の末、所期の目的は果せず5月18日にパリ約定を結ぶと、予定を切り上げて元治元年7月18日(1864.8.19)突如横浜に帰着した。強硬な鎖港派だった池田も西欧を実現するに及んで積極的な開港論者となり、同22日に大胆な建白を呈して、副使ともども即日処罰された。幕府は24日に約定の破棄を英仏米蘭各国代表に申し入れている。当初より鎖港談判の成果は期待されず、多分に国内事情で幕府が企てた不運な遣外使節ではあったが、それは以後の幕仏関係の軸を動かした点で他の遣外使節に劣らぬ意味を持ったといわれている。塩田にとって、初の海外渡航は内国問題と外交の厳しさに直に触れた体験であったろう。この使節については、岸加四郎著『鶴遺老 池田筑後守長発伝』(井原市教育委員会 昭44)に、エピソードをまじえ詳述されている。塩田についてもいくつかのエピソードが書かれているが、幼時にかかった痘瘡の跡にナポレオン3世が強い関心を示したという。当時の写真が石黒敬七編『写された幕末』(アソカ書房 昭32~34)等に見られ、彼の顔は仏学の先覚としてより、痘瘡によって、人々

の記憶に残ることとなった。

当時池田長発が将来した洋書33点は、現在東京大学史料編纂所に残っていて、金井圓氏による目録紹介がある。文庫にもこの時持帰った洋書数点がみられる。例えば Maillard, L. "Notes sur l'île de Reunion (Bourbon)" (Paris, 1862) には、"Offers à l'ambassade japonais par l'auteur L. Maillard" の献辞がある。池田が著者から贈られたものを塩田に譲ったのであろう。また "Explication des Ouvrage de peintre, Sculpteur, Architecture Gravure et Lithographie des Artistes au Palais de Champs-Elysées, le 1^{er} Mai 1864" は、不調に終わった交渉の合間に、慰みに見物した時のものである。ついでながら彼は終生、西洋美術を愛好し、イタリアから油彩画を持帰ったりしたときいている。西洋美術への関心は、漢学の素養と共に彼が実務だけの人ではなかったことを物語っていよう。

なおこの使節の果たした役割のひとつに <公> の依頼によって将来された大量の英仏書がある。万延元年遣米使節の将来本に関しては、公私のいずれについても、屢々、語られるが、これについて触れたものは沼田次郎『幕末洋学史』(刀江書院 昭25) ぐらいである。われわれは当時開成所、外国方に収められた英仏書の和訳翻字目録を『統通信全覽類輯 修好門』(維新史学会編『幕末維新外交史料集成』第6巻 昭19 225~230頁) にみる事が出来る。その多くは、戊辰役の江戸城明け渡しに際し、海路駿府に移送され、現在、静岡県立中央図書館「葵文庫」に残っている。一行中、仏語を解し英語にも堪能であったのは塩田唯一人であった。洋書買付において塩田の果たした役割りは大きなものだったに相違ない。塩田にとって仏語は単にマスターして

いる一外国語にすぎなかったと思われるが、時代と情況がそれを必要とし、この後彼は仏語の実務官僚として忙殺される。

慶応元年閏5月(1865.7)柴田剛中特命理事官が筆頭に総勢6名の初の実務集団が製鉄所備品購入、調査等の名目で渡欧し、福地源一郎と共に塩田も通詞として参加した。福地は『懐往事談』(日本史籍協会明33 東大出版会 昭55)で、「余は其の時は更に仏語を知らず、英語とても甚だ未熟なれば、通弁も翻訳も都て塩田一人を煩したり」と回想している。彼らは実務集団らしく、出発前に西印度セントラル銀行を通じて外国為替を組んで送金し、パリ逗留時はホテルを引払って民家を借りた。また製鉄器材の買入れ等を行う傍ら、観劇を愉むという闊達さであった。塩田は出発前からこれらの交渉事を一手に引受けたのであった。理事官柴田は実直の人として皆に慕われた。パリでは漆塗りの陣笠を披り、雙刀を手挟んで歩く姿を通行人に揶揄されるのに閉口した若い一行が、在蘭留学生の洋装をみて、それを願った時、「殊俗異風の嘲嗤は耻辱に非ず風俗は國家の憲章を以てするに非ざるよりは妄りに変ずべからず」と、小袖・小袴・羽織を脱がせなかったという。しかし衣服はともあれ、彼らが選んだ書物は維新後の人びとと変りなかった。塩田が持帰ったものでは、例えば La Bruyer, J. de "Les Caractères ou les Moeurs de Ce Siècle" (Paris, 1865) がある。炯眼辛辣の定評あるモラリストがルイ14世治政下の繁栄に退廃の翳りを目敏く描いた本書を、彼は如何なる関心をもって読んだのであろうか。

慶応2年2月(1866.3)に帰国した後、塩田は横須賀造船所設立をはじめとする、幕府内でも機密に属する外交案件で、小栗

忠順、栗本鋤雲に従った。彼がわが国で初めて“Bank”に“銀行”の訳語を与えたのも同年のことである。神長倉真民『明治産業発生史』(ダイヤモンド社 昭11)に、反訳の紹介があり、塩田の役廻りと語学力も知れるので、少しく長いが引用する。⁽²⁾

オリエンタルバンクコオペレーション
横浜に於て 千八百六十六年九月廿八日
御勘定奉行

小栗上野介臺下え

日本政府六百萬ドルラルの高を借用するを望まるゝに付、右期限を記せし當月廿日附の貴簡落手せしことを告ぐるの榮あり。最初の一分期も百萬ドルラは此銀行に係はず、全く別段の取扱を経るものとして、是は日本政府の都合次第と速に取極ることを得べし、當銀行え金高の形として引渡さるゝ銅の價を定むることは、可成注意して日本政府の益を計り取扱ふべし。五萬(百脱か)ドルラルの期限は當銀行及びソシエテゼネラルの参考を経れば、當地にある双方の代人より各其本店に申送るべし。オリエンタルバンクコオペレーション代人として、余は此事を、英國へ趣くべき第一の郵船を以て、當銀行の本店え遣はし、總轄公司えも申立べし。此銀行に關する以上、新に取組む諸件の可否を斷ずるの任此者一人にあり、右公司決斷の趣余に申來り次第、其許に通知すべし。

右の件を余が本店へ申遣す折を以て、日本政府先前より此銀行と事を取扱ふことにおゐて、常に快く且正實の處置ありしことを告げ、其外總て日本の物産に富み政府の威力ありて依頼すべきとの事に付、余信恩するの意を縷述するは、余がために最可喜職掌なりと思へり。

同じ頃、仏国公使ロッシュのたつての希望で、彼は横浜に移り、前年3月に開校された仏語学伝習所 (Collège Franco-Japponais) で、唯一の日本人として教鞭を取っている。当時ロッシュは、訳官として全面的に頼り⁶⁰とし、また伝習所の校長格でもあったカションが病氣勝ちで、支障を来していたのである。このため彼は塩田に仏語教師のみならず、専任通訳をも期待して、幕府要路に働きかけたのである。彼はカションの帰国が決ったこともあって、同年8月7日(9.15)付の老中河内守(井上正直)宛書簡で、塩田の横浜移住とカションの代役とを督促し、文中で塩田の身分昇格についてまで言及している。他国の外交官が相手側の昇任にまで触れたということは、ロッシュの個性もさることながら、やはり異例の思い入れといえるだろう。9月にカションが帰国してからは⁶¹仏国公使館で彼に代る通訳官は補充されなかった。ロッシュは外交上の情報収集も塩田と彼をパイプとする幕府親仏派への依存を強めたのである。いうまでもなくこの時以降塩田はロッシュの専任通訳官の状態になった。幕府瓦解に至る翌3年2月6、7日(1867.3.11, 12)に亘る大坂城内でのロッシュと將軍の密議でも、彼が通訳をつとめている。同年7月(同8)、塩田は開成所教授職外国奉行支配通弁御用出役から外国奉行支配組頭に遷るが、日本国内での外交にしのぎを削る英仏⁶²兩國と混乱する国内事情のはざまに身を置いていた。彼の上司で良き相談相手であった栗本はパリ万国博覧会の後処理のため渡仏し、その間、幕府がわが国の正当な代表であるとの国書を塩田に仏訳させてパリ

に送るよう頻りに催促する始末であった。当時のエピソードのひとつを紹介すると、界事件の際、英国公使パークス(H.S. Parkes)はロッシュの動きを封じるため、アーネスト・サトウ(E. Satow)に命じて塩田を監視させたという。同年11月の大政奉還直後のことである。外交に敗れたロッシュは帰国に際し、⁶³塩田をフランスに伴う意向であったというが彼にその意志はなかったようである。

明治元年7月(1868.8)旧幕府英国留学生の帰国があった。箕作奎吾たちはロンドンからの帰国を記念して、塩田に本を贈っている。箕作が親愛の献辞を認めた August 9th 1868 の日付ある “Heroism and Adventure in Nineteenth Century as Exemplified in the American Civil War” (Lond. 1867) や、Yeigoro Naruse (成瀬鏡五郎か) の 8th August 1868 の日付を持つ Creasy, E.S. “Fifteen Battles of the World” 10th ed. (Lond. 1860) は、未だ硝煙の消えぬ維新期に留学生の持帰った本として興味深い。また “The National Reading Books, adapted to the Government Code. Book the Six (Lond. n.d.) のとびらには、No. 24 T. Kawage の署名がみられる。同年春に自刃した川路聖謨の旧蔵書と思われるが、これは川路の息子で、同じく幕府留学生であった寛堂から贈られたのであろうか。手沢の跡はみられるが、来歴を知る手だては見当らない。

維新の後、塩田は家をあげて横浜に移り、家塾で仏語を教えた。この時25才であった。

本稿では塩田三郎の外国語学習の経緯とその展開に沿って、文庫に残る幾冊かの図書を紹介するにとどまった。付言しておく、蔵書が急激な増加をみせるのは、明治

3年4月(1870.5)民部省に徴され、横浜鉄道掛総裁を数か月つとめた後、外務省に転じ、同年閏10月(同. 12)初代少弁務使 鮫島尚信に差添い、パリに赴いてからである。更に翌年11月(1871.12)に一等書記官として岩倉使節に随行し、6年4月に帰国するまでに購求した図書は優に100点を越える。二等書記官として同行し、のち外務大臣となった旧幕府留学生林董は、『後は昔の記』(時事新報社 明43)の中で塩田について、「才識卓絶にして能く英仏二国の語に通じ早くより万国公法及び生理学等を修めて国家有用の材なりしが何分にも極めて吝嗇なるが為に人に厭われ嫌われたり。云々」と述べている。これは使節一行がロンドンに滞在中、銀行詐欺にあい、旅費を失った折に作ったいくつかの落首に、“爪に火をとぼしてためた二千両さすが塩田は辛き目にあふ”というのがあり、それにかこつけての人物評である。後半は痛烈な塩田批判ではあるが、林の人物評は同書の沼間守一評でも見られるように、同友同輩を貶る傾向もみられ、常に後塵を拝した塩田に対し、殊更にその性向が顕われたきらいがある。これまで閲し得た文献、書簡類から林のいう塩田像は思い泛ばない。筆者がそこに新政府に徴された旧幕出身者同志の相剋をみるのはうがちすぎであろうか。勿論、塩田の儉約振りは相当なものだったようで、同行した函館以来の友人大島高任も同事件に触れて、“爪に火をとぼしてためし金とられさすが塩田は辛き目に逢ふ”と紹介し、「蓋し塩田の節儉」と書いている。見るところ塩田の節儉は集書に注がれたようである。事件に同情したのであろうか、福地源一郎はロンドンで Duhalde, P. “General History of China” (Lond. 1716~41 4冊)を塩田に贈っている。

むしろ注目されることは、明治になってから購求した洋書が悉く英書であって、旅行ガイド、受贈図書等を除くと、仏書が殆ど見られないことである。仏語の遣い手として、幕末期に並ぶ者のなかった塩田が何故にヴォルテール (F.M. Voltaire)、コント (Aug. Compt)、トックヴィル (A.C. Tocqueville) 等の著作を英書で読み、またユーゴ (V. Hugo) の小説まで英訳書で読んだのであろうか。当時、英書が雪崩れを打って流入したこともあろうが、塩田の場合、幕末、明治初年の公私に亘る生活が仏学に対する彼の気持をひき離したと思われれる。

注

- (1) <塩田文庫ノ件>「東京図書館明治二十五年報」(『帝国図書館年報』昭49複製版 143頁)
- (2) 現在支部上野図書館に残る「書籍等献納願書」に綴じ込まれた塩田未亡人の文書二通がある。

(1)

今般故塩田三郎遺書別紙目錄乃通り貴館に献納仕り候間、永ク同人の名を存し貴館ニ御備付公衆に閱覽センメラレ候様仕度此段奉願候也

明治二十五年十一月廿六日 亡塩田三郎妻

麴町区下式番町七十二番地

東京士族 塩田照子

東京図書館長田中稻城殿

(2)

拝啓陳ハ過般献納致シ候洋籍乃残り別包乃如く古匣の底より見出し候ニ付差上仕候処何卒可然前献納書籍中に御加へよしなに此段奉願願上候也

明治二十五年十二月十日

塩田照
(照(子)は通称)

なお塩田家に残っていた遺品は2, 3を残し、昭和20年3月の東京空襲で灰燼に帰したと伺っている。

- (3) 「明治廿五年諸向往復書」

- (4) わが国の仏語研究は文化6年(1808)に長

崎でオランダ通詞6名がゾーフ(H. Doeff)について仏語を学んだのを嚆矢とする。また江戸でも、既に村上英俊が安政6年に蕃書調所教授手伝となっている。当時、入江文郎のような卓れた仏学者もいたが、会話の点で塩田や立に代り得なかつたのであろう。

栗本鋤雲は次のように述べている。

「仏国陸軍教師聘入の件は既に定まりたれど、我國にて仏語に通ぜし者、僅に塩田三郎、立広作の二人が箱館に在るの日、メルメ・デ・カションに従ひ受け覚へたるのみなるに、併も兩人は英語に通じたるを以て、夫々既に職に就き居れば云々」(『横須賀造船所経営の事』『栗本鋤雲遺稿』鎌倉書房 昭18 130頁)

- (5) 明治3年4月に明治政府に徴された時から明治13年5月までは、本人提出の履歴書が残っている。(『百官履歴』第一巻 所収)
- (6) 塩田順菴(記)「先祖書」ならびに「親類書」(日比氏蔵)
- (7) 宮河と宮川の表記がみられ、通常<宮川>を用いたようであるが、正式には<宮河>である。
- (8) W.R. Blakeの書簡は、現在、北海道大学北方資料室に所蔵され、長谷川誠一氏の詳細な解説が「米人見列屈氏来翰編」(『英学史研究』第12号 37~57頁)になされている。塩田に触れた上海からの書簡の原文も同論文に収めてある。
- (9) 安政3年を6年としたものも見受けられる。『事実文編』所収の塩田順菴の墓誌によれば、安政2年に函館在住医に再任されるが、『村垣淡路守公務日記』安政3年8月18日の条にみられるように、渡道は安政3年であろう。
- (10) 『大日本古文書 幕末外国関係文書三』(安政五年正月 72)
- (11) 文部省『日本教育史資料 七』(明25 666頁) 仏学史関係図書では安政6年3月に村上英俊が教授手伝に登用された時とするものが多い。ただ万延元年4月市川文吉が調所で仏語学習を命じられた時、教える者が居ないため、三田の正泉寺に通ったことから、教授は文久元年からといえる。
- (12) Hodgeson, C.P. "A Residence at Naga-

saki and Hakodate in 1859~1960" (Lond. 1861 95頁)

- (13) 『大日本古文書 幕末外国関係文書之二八』(安政六年十月 40)
- (14) 同上(安政六年十月 168, 178, 189)
- (15) Ainciart, J.P. 高島源一郎編『函館とカトリック』(函館元町カトリック教会 昭34)
- (16) 『大日本古文書 幕末外国関係文書二八』(万延元年二月 137, 138)
- (17) 『函館とカトリック』に収められた奉行竹内の書簡は異様なまでの賛嘆と謝辞に溢れている。
- (18) 富田仁『メルメ・カション—幕末フランス怪僧伝』(有隣堂 昭55 63頁)
- (19) 『万延元年遣米使節史料集成 二』(風間書房 昭36) 所収、彼はペリー来航時には『米船紀事』も著している。
- (20) 小西四郎「名村元度」の「西行日記」について(『同上』300頁)
- (21) 神長倉真氏『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』(ダイヤモンド社 昭10) ほか
- (22) 富田仁『メルメ・ド・カションと仏英和辞典』(復刻版『仏英和辞典』付録 カルチャー出版社 1977) ほか。
- (23) 同『メルメ・カション—幕末フランス怪僧伝』
- (24) 『大日本古文書 幕末外国関係文書之二九』22~23頁
- (25) 「モンフランといふ人は河津が函館で懇意で、又、塩田三郎はモンフランの弟子であります。鎖港の談判の中に遣入って種々取計ひしやうと言ったがモンフランを断つたものであるから、不承知で悪く言って歩きました。」(明治35.5.29) (『史談会速記録』第71輯 <明治39.9.13> 「遣仏使節鎖港談判の顛末 附21節 河田巖(談)」)
- (26) ねず・まさし「1864年のパリ協約をめぐるフランス第二帝政と徳川幕府との交渉」(『歴史学研究』210号 21~32頁)
- (27) 金井圓「東京大学史料編纂所蔵文久遣欧使節池田筑後守長発将来本について」(『蘭学資料研究会研究報告』第83号 1961.6.17)
- (28) 『静岡県立中央図書館葵文庫江戸幕府旧蔵洋書目録』(昭42)
- (29) <銀行>の訳語は通常、明治に入って国立

銀行創設時、大蔵省が英華辞典から採ったとされている。塩田は1866年に香港で刊行されたロブスチエイドの『英華辞典』（目録参照）の上巻を持っており、これに銀行の漢字があるので、それに従ったのであろう。

- (30) 開校の時期について、いくつかの異説もある。因に『横浜市史稿 教育編』4頁には慶応2年11月設立とある。しかし同年10月に最初の得業式が行われ、横浜に移った塩田がロッシュの祝辞を訳読していることからみても、設立は1年半余り遡る。伝習所の設立過程については、富田仁『仏蘭西学のあけぼの』（カルチャー出版社 昭50）に詳しい。

- (31) “Me permettez-vous de vous faire observer que M. Shioda devant s'éloigner de Yedo et remplir une double tâche, devrait abstenir de Vos Excellences, un grade et une rémunération en rapport avec ses nouvelles fonctions” [部分] (『勝田家文書』日本史籍協会 昭5)
- (32) 「柳営補任 卷之余」(『大日本近世史料 柳営補任 六』昭40 12頁)
- (33) 石井孝『明治維新の国際的環境』(吉川弘文館 昭32 369頁)
- (34) 大島信蔵『大島高行行実』(昭13 713~714頁)

〔資料〕 <塩田文庫> 語学関係図書目録

- Adler, G.J.: Dictionary of the German and English languages. New York, D. Appleton, 1884. 2 pts. in 1 (xii, 852 & 522 p.) 26cm. [433.2-A237d]
- Andrews, E.A.: Latin-English lexicon, founded on the Latin-German lexicon of Dr. William Freund. New ed. & enl. partly rev. New York, Harper, 1869. 1v. (unpaged) 26cm. [473.2-A566d]
- Aston, W.G.: A comparative study of the Japanese and Korean languages. London 1879. 48p. 22cm. (Royal Asiatic Society of Gt. Britain and Ireland publication) [495.1-A867c]
- Barnes' new national third reader. New York, A.S. Barnes, 1885. 240p. 19cm. [G-125]
- [Barnes' new national reader] New national second reader. Tokyo, Meiji Shobō, 1887. 175p. 19cm. [G-126]
- Bellenger, W. & F.: Nouveau guide de conversations modernes en français, anglais et allemand. Berlin, B. Behr's, 1865. v, 236p. 15cm. [G-110]
- Contanseau, H.: A pocket dictionary of the French and English languages. London, Longmans, 1870. 2 pts. in 1 (x, 273 & 350p.) 14cm. [443.2-C759p]
- A dictionary of daily blunders, containing a collection of mistakes often made in speaking and writing. London, Whittaker, [n.d.] 127p. 13cm. [428.3-D554]
- Dictionnaire complet français, allemand, anglais à l'usage des trois nations. 9^e éd. Leipzig, Brockhaus, 1870. 3 pts. in 1 (265, 539, 376p.) 19cm. [413-D554]
- Dixson, J.M.: Dictionary of idiomatic English phrases, specially designed for the use of Japanese students. Tokyo, Kyoyeki Shosha, 1887. 352p. 23cm. [G-137]

.....: English composition. 2d ed. Tokyo, Hakubunsha, 1889. viii, 299p. 19cm.
(Hakubunsha series of English textbook, no. 2) [G-120]

.....: Teacher's companion to no. 1 (English composition). Tokyo, Hakubunsha,
1889. 237p. 19cm. (Hakubunsha series of English textbook, No. 2) [G-101]

Green, S.S.: Grammar of the English language. Philadelphia, Cowperthwait, 1875,
323p. 20cm. [G-102]

Hamilton, H. & Legros, E.: Dictionnaire international français-anglais. Paris, C. Fou-
laut, 1872. 902p. 26cm. [443.2-H218d]

Havet, A.: Complete French class-book, grammatical and idiomatic French manual,
for the use of British schools and private students. London, Dulau [1853] xii, 423p.
23cm. [G-108]

Ichikawa, Yoshio: English-Japanese and Japanese-English dictionary with an appendix.
Rev. by S. Shimada. New ed. Yokohama, Seishi Bunsha, 1876. 589p. 22cm. [423.9-
I160e]

Imbault-Huart, C.: Cours eclectique graduel et pratique de langue chinoise parlée.
(京話指南) Peking, Typographie du Pei-T'ang, 1888. 3vols. 31cm. & 28cm. [K-60]

Imbrie, W.G.: Handbook of English-Japanese etymology. Tokiyo, Torindo, 1884. vii,
207p. 20cm. [495.65-I32h]

James, W. & Molé, A.: Dictionary of the English and French languages. Leipzig,
Tauchnitz, 1865. 1v. (464, viii, 428p.). 17cm. [443.2-J29d]

官話指南 Koan-hoa Tche-Nan; Boussole du langage mandarin, traduite et annotée par
H. Boucher. v. 2. Zi-ka-wei, 1887. 234p. 24cm. [G-114]

Kuijper, G.: Eléments de grammaire néerlandaise à l'usage des étrangers. La Haye,
M. Nijhoff, 1858. 186p. 19cm. [G-118]

Kure, D. & Chêng, Y.: An English-Chinese and Japanese conversation (日漢英語言合
璧) Tokyo, Maruzen, 1888. 195p. 21cm. [G-115]

Kwong, Ki-chiu: An English and Chinese dictionary. (華英字典). Shanghai, Tien-shih-
ohai, 1879. 1v. (various pages) 23cm. [495.1-M488e]

.....: 字典集成・雜字撮要 Hongkong, Chinese Pub. Co., 1875. 1v. (various
pages). 23cm. [495.1-K98e]

Larousse dictionnaire complet de la langue française, 1886. 1223p. 16cm. [443-
L332d]

Lobscheid, W.: English and Chinese dictionary. (英華字典). Hongkong, 1866-68. 2v.

(2014p.) 34cm. [495.1-L797e]

Lolme, J.L. de: French and English dictionary. Rev. & corr. by E. Raubaud. 22d ed. London, Cassell, [n.d., pref. in 1881] xxvi, 1122p. 20cm. [443.2-L838f]

Macmillan's reading books. Book VI (Standard VI and higher class). London, 1878. li, 377p. 18cm. [G-122]

Manuel de conversation pour le voyageur en quatre langues; français, allemand, anglais, italien. 21^e éd. Coblenz, K. Baedeker, 1873. ix, 331p. 17cm. [G-116]

Mavor, W.: The English spelling book. London, G. Routledge, [n.d.] 160p. 17cm. [G-121]

Medhurst, W.H.: English-Japanese and Japanese-English vocabulary, compiled from native works. Batavia, 1830. vii, 344p. 22cm. (pp. v-vi; 63-70 missing). [423.9-M488e]

Mouillesaux de Bernieres, A.: Kung Yu So Táang 公餘瑣談; l'étude du chinois parlé et écrit. Peking, Typographie du Pé-T'ang, 1886. 231p. 30cm. [K-52]

Muramatsu, M.: Meiji kwaiwahan; a treasury of conversational phrases in English and Japanese, or dialogues on ordinary and familiar topic for the use of Japanese students of English language. Tokyo, Maruzen, 1886. 3v. in 1 (228p.) 18cm. [G-117]

Murray, L.: An English grammar, comprehending the principles and rules of the language. 8th ed. London, Longman, Brown, Greens, 1853. 2v. (xxi, 544 & 516p.) 23cm. [G-103]

Ollendorff's new method of learning to read, write and speak the French language, by V. Value. New York, D. Appleton, 1885. xii, 588p. 19cm. [G-106]

Ollendorff's new method of learning to read, write and speak the German language, by G.J. Adler. New York, D. Appleton, 1872. xii, 510p. 19cm. [G-106-2]

Otto, E.: German conversation-grammar. 10th ed. Leipzig, G. Groos, 1870. xvi, 443p. 19cm. [G-107]

Paucker, A.: A manual of Russian conversation. St. Pétersbourg [imp.], 1863. 200p. 17cm. [G-113]

Roget, P.M.: Thesaurus of English words and phrases. Enl. & rev. by J.L. Roget. London, Longmans, Green, 1886. xlv, 669p. 21cm. [G-97]

Routledge's desk dictionary of English language, adapted to the present state of English literature. Ed. by P.A. Nuttall. London, [n.d.] viii, 632p. 9cm. [423-N981r]

Royal readers. No. II (The Royal school series). London, Nelson, 1887. 142p. 16cm.

[G-112]

Sanders, C.W. : Union fourth reader. Tokio, 1882. xii, 408p. 16cm. Title page missing.

[G-123]

Sardou, A. : French language self-taught; a manual of idiomatic phraseology. New York, D. Appleton, 1883. xii, 470p. 21cm. [G-109]

The secretary's assistant and correspondent's guide. 15th ed. London, Whittaker, [n.d.] 120p. 13cm. [G-134]

Shibata, M. & Koyasu, T. : [柴田昌吉, 子安峻] : An English and Japanese dictionary; explanatory pronouncing and etymological containing all English in present use with an appendix. (增補訂正英和字彙) 1318p. 26cm. Tokyo, Ni-Shu-Sha, 1882. [423.9-S555e]

Smith, L. & Hamilton, H. : The international English and French dictionary. New ed. Paris, C. Foulaut, 1871. 798p. 26cm. [443.2-S654i]

Spiers, A. : Dictionnaire general francais-anglais. 8^e éd. Paris, V^e Baudry, 1856. 623p. 24cm. [443.2-S755d]

Stent, G.C. : A Chinese and English vocabulary in the Pekinese dialect. (漢英合璧相連字彙語) 2d ed. Shanghai, Pres. Mission, 1877. xi, 717p. 22cm. [495.1-S826c]

Swinton, W. : A grammar containing the etymology and syntax of the English language. Tokyo, Rikugokuwan, 1885. viii, 257p. 19cm. [G-104]

Thieme, F.W. & Preusser, E. : Neues vollständiges kritisches Wörterbuch der englischen und deutschen Sprache. Altona, Haendecke & Lehmkuhl, 1859. 2pts. in 1 (viii, 777 & 574p.) 24cm. [433.2-T433n]

Value, V. : A key to the exercise in Ollendorff's new method of learning to read, write and speak the French language. Rev. ed. New York, D. Appleton, 1886. 291p. 19cm. [G-105]

A key to the exercise in Ollendorff's new method of learning to read, write and speak the German language. Rev. ed. New York, D. Appleton, 1872. 182p. 19cm. [G-105-2]

Vocabulary containing Chinese words and phrases, peculiar to Canton and Macao, and to the trade of those books. Macao, Honorable Co. Pr., 1824. 77l. 16cm. [495.1-V872]

Wade, T.F. & Hillier, W.C. : Yuyen ts'u erh chi. (語言自選集). Shanghai, Kelly & Walsh, 1886. 3v. 31cm. [K-51]

Warne's bijou dictionary of the English language compiled from the authorities of

- Johnson Sheridan, etc. Ed. by A.C. Ewald. Tokyo, Maruya, 1886. 640p. 9cm. [423-E94w]
- Webster, N. : A condensed dictionary of the English language, with copious etymological derivations. 3d ed. London, G. Routledge, 1887. vii, 798p. 20cm. [423-W382c]
- : Dictionary of the English language, exhibiting the origin, orthography, pronunciations and definition of words. Rev. & enl. by Goodrich. London, G. Routledge, 1862. 1v. (various pages) 25cm. [423-W382d9]
- : A dictionary of the English language, explanatory pronouncing etymological and synopsis. Counting House ed. New York, Ivison, Blakeman, Taylor, 1871. xxxi, 632p. 23cm. [423-W382dc]
- Whately, R. : Elements of rhetoric. London, Longmans, Green, 1877. xvi, 319p. 20cm. [G-98]
- Zirardini, J. : Nouveau guide de conversations modernes en francais et italien. Paris, Baudry, [n.d.] 220p. 13cm. [G-111]

(いとう・なおたけ 人文課)

